

The Victorian Studies Society of Japan

Newsletter No. 5

1 May 2006

真の「教養」復権を求めて

南山大学名誉教授 荻野昌利

日本の大学でカリキュラムから教養課程の名称が消滅し、「教養」という言葉そのものさえもが半ば死語となりつつある今日このごろ、その言葉を 19 世紀の代表的宗教思想家 John Henry Newman と結びつけて語る人はほとんどいないだろう。しかし、彼の『大学の理念』*The Idea of a University* (1873) は、真の教養とはなにか、大学とはなにかを改めて考えるための、私たち日本人にとってかけがえのない伴侶となる古典的名著である。

イギリスにおいては、ヴィクトリア朝中期に至るまで、オックスフォード、ケンブリッジ両大学におけるカリキュラムの根幹をなしていたのは、中世以来の伝統的なギリシャ・ラテンの古典を中心にした文法、論理学、歴史など、いわゆる“liberal arts”「自由七科」であった。その知識を修得することが、即学生に求められる「教養」であった。そしてその質を問われることなく、大学においてこのような半ば形骸化した古典的「教養」を学んだ名目エリートたちによって、イギリスの Establishment は半ば独占的に支配されてきたのである。

こうした大学の旧態依然の教育のあり方に最初に疑問を呈し、精神の刷新を呼びかけたのが Newman だった。『大学の理念』は、彼が 1852 年新たに設立されたダブリン大学の初代学長に任ぜられてから在任中の数年間、折に触れて大学の使命と目的について講じたものを中心に、一冊にまとめたものである。その本の思想的バックボーンとなっているのは、オックスフォード大学であった。そこが学生のとときからカトリックに改宗するまで、人生の大半を過ごしてきた場所だったのだから、それも当然であろう。だが、彼は母校に惜しみのない愛情を注ぎつつも、その旧弊な教育制度にあきたりず、彼が理想とするところを新たに設立された大学で実現しようとしたのである。

なかでもこの本のなかで彼が力説したのは、知識の質の問題だった。本来大学とは知識を「丸かじり」をする場ではなく、知性そのものを「涵養」“culture”する場であるということ、すなわち知性の力を磨き、「現状を正しく直感的に評価する能力」を涵養する場所であるということだった。知識と言うものは、この知性が十全に発揚されたときに初めて知識となりうるものであって、真の大学と言うものは、彼によれば、従来の形骸化した“liberal arts”に

拘泥することなく、すべての学問分野に自由闊達な知性を行使することを許容する“liberal education”の場でなければならぬ。そもそも“liberal”なる語は、「自由人にふさわしい」という意味を有する。今日流に改めれば、「紳士たるにふさわしい」ということになるだろうか。つまり大学とは本来そのような訓練をうけて知的判断力を鍛え、知識を習得し、真の教養を身につけた紳士を養成することを目的とする場所なのである。これが彼の思い描いている大学の理想像であった。

しかし、残念ながら Newman の理想とする大学実現の夢は、アイルランドの宗教的保守主義の厚い壁に阻まれ、空しくも潰れてしまった。また偏狭な実学優先の土地柄も災いした。四年後、彼は思い半ばにして学長の地位を追われ、以後二度と大学で教壇に立つことはなかったのである。大学の社会的効用と実利性を求める強い圧力は徐々に周辺に高まり、彼の唱えるような知性と教養の涵養を第一義とする大学の存在そのものが、厳しい世間的批判の風波に晒される時代がすでに始まりつつあったのだ。

当時、こうした危機意識は、Matthew Arnold の『教養と無秩序』*Culture and Anarchy* (1869) に見られるように、心ある知識人の等しく共有するものであった。教養主義衰退の危機はすでに大学だけの問題ではなくなっていた。時代は教養など意に介さぬ、実利第一主義の俗物 (philistine) どもの支配する世界になりつつあったのである。そのような時の流れのなかで、Newman の理想は所詮保守反動の象徴としてしか世間には映らなかつた。そしてその風潮は、ご存知のように今日に至るまでやむことはない。今にして思えば、Newman が学長職を更迭されたこと自体、以後の大学教育における教養主義の権威失墜の第一歩を刻む象徴的事件ではなかつたらうか。

こんなことを言うと、人はアナクロニズムと言うかも知れない。しかし、この「教養」の権威が失墜し、「無秩序」の横行する現代日本にあって、同じ大学人たるもの、その危機的状況を再認識し、今こそ『大学の理念』を熟読し、Newman の説く教養主義の理想を虚心坦懐、初心に立ち返って反芻することが求められているのではないだろうか。

Greetings from Overseas Victorian Societies

Joanne Shattock, University of Leicester

Director, Victorian Studies Centre

As the Founding and now President of the British Association for Victorian Studies (BAVS) I am pleased to extend a warm welcome to our colleagues in the Victorian Studies Society of Japan. We invite you to join us at our 7th annual conference at the University of Liverpool from 7 - 9 September 2006. This year's theme is 'Victorian Cultures in Conflict'. The current intellectual vitality of Victorian Studies owes much to the fact that literary scholars and critics engage effectively with colleagues in history, history of art, science, and the social sciences. It is this multiplicity of perspectives on the Victorian period that creates the vigorous exchanges which are a feature of our conferences. More information about BAVS can be found on our website <www.bavsuk.org>.

I am pleased, too, to send greetings from the Victorian Studies Centre at the University of Leicester, where many students from Japan have studied on our interdisciplinary M. A. in Victorian Studies. The work of the Centre continues to be multidisciplinary in both teaching and research.

My own research includes the general editorship of the first complete edition of *The Works of Elizabeth Gaskell*, the first five volumes of which were published by Pickering and Chatto in 2005, with the second five to follow in 2006. I am currently working on the *Cambridge Companion to English Literature 1830-1914* to be published by Cambridge University Press. The chronological boundaries of this new Cambridge Companion and its chapters reflect current issues in Victorian Studies research. The time span 1830-1914 allows a consideration of the 1830s, a formative and 'pre-Victorian' decade, and also affords a longer view of the nineteenth century, whose cultural borders do not end conveniently at 1900 or 1901.

Several chapters focus on the intersection of Victorian literature with other discourses, scientific, medical, theological, and historical, and their impact on individual writers. The Companion also reflects new areas of concern: the impact of Empire and anxieties about cultural hegemony; and the creative tensions between Irish and Scottish writing and the dominant London-based literary culture. It also explores the roles of author and reader, the significance of life-writing, and cultural exchanges with North America, and Europe.

Dino Franco Felluga, Purdue University

Chair, North American Victorian Studies Association

I write to the members of the Victorian Studies Society of Japan with an invitation to join the North American Victorian Studies Association (NAVSA) at our annual conferences. The next conference will occur at Purdue University in West Lafayette, Indiana on Aug. 31 to Sept. 3, 2006. We enthusiastically invite our fellow Victorianists in all fields to join us. For more information, please visit our website <www.purdue.edu/NAVSA>.

I have been asked by Mitsuharu Matsuoka to speak about the future of Victorian studies and how NAVSA impacts that future. The recent NAVSA conference issues of *Victorian Studies* could, in fact, be said to provide a snapshot of the current state of Victorian studies in the United States. Previously dominated by theory and cultural studies, the study of the Victorian period continues to owe a debt to these approaches; however, a few trends may be discerned. I would say that cultural studies approaches have been succeeded by a fascination with specific ways of knowing and specific objects that implement that knowledge. The topic of this year's NAVSA conference, "*scientia* and *techne*," speaks not only to the burgeoning number of recent studies on science and technology but also to the etymological senses of the terms, i.e., knowledge and craft. In particular, the conference will explore the new tendency to think about *ways* of thinking in the Victorian period or to consider specific objects that implement that knowledge in precise, material ways.

My own work certainly follows this trend. I should begin perhaps by stating that I am Chair of NAVSA's Executive Council and Associate Professor of English at Purdue University, West Lafayette. My first book, *The Perversity of Poetry: Romantic Ideology and the Popular Male Poet of Genius* (SUNY), was published in 2005. The book explores the reason why such contending claims were made for poetry in the nineteenth century: that it is a panacea for the ills of the age and that it is a pandemic at the heart of the social order. The former position was originally associated particularly with Scott's poetry; the latter with Byron's, while Tennyson assumed a position between the two. In exploring the logic behind these attributions, *The Perversity of Poetry* brings to light a host of previously unexplored medical and historical material while arguing that the medical rhetoric associated with all three authors served to shape politics.

文化史

幻灯界への誘い

中京大学教授 岩田 託子

幻灯機の由来は 17 世紀オランダのキルヒャーに遡るが、19 世紀英国では非常にポピュラーな娯楽となった。ソフトウェアにあたる種板も多種多様に製作され、大きな会場で上演されたのみならず、他方では家庭にも入り込んで、特に子ども向き娯楽として定着した。加えて、多人数を同時に啓蒙・教化する有効な手段として、禁酒運動の集会にはつきものであった。以上がヴィクトリア朝文化における幻灯機の、ごく大雑把な位置づけだろう。

では具体的にどのような幻灯をヴィクトリアンたちは見ていたのか。どのような演目を、どういう順序で、どのくらいの時間にわたって鑑賞したのか、と疑問はつきない。

幸い手がかりになる書物もすでにある。例をあげると、

1. Household, G. A. and L. M. H. Smith. *To Catch a Sunbeam: Victorian Reality through the Magic Lantern*. London: Michael Joseph, 1979.
2. Humphries, Steve. *Victorian Britain through the Magic Lantern*. London: Sidgwick & Jackson, 1989.
3. Robinson, David, Stephen Herbert and Richard Crangle, eds. *Encyclopaedia of the Magic Lantern*. London: The Magic Lantern Society, 2001.
4. Smith, Grahame. *Dickens and the Dream of Cinema*. Manchester: Manchester UP, 2003.

1. は愛好家が、まるで上演するかのように種板を紹介している。2. はフリーガンについての聞き書き（邦題『大英帝国の子どもたち——非行と抵抗の社会史』 柘植書房、1990 年）で知られる研究者による名著。3. は英国に本部を置く幻灯機協会の総力を結集した決定版事典。会員の尽力により日本関連の記述も的確で、伝統的な「写し絵」から現在活躍中の「みんわ座」まで充実している。4. には、作家と幻灯の関連を描写に見出す洞察もあり、手元のペーパーバック版表紙は幻灯上映を楽しむ子どもたちを描いている。

幻灯機協会は四年に一度、国際会議を開催している。近くは第七回大会が 2005 年 4 月 22 日から 24 日まで、英国第二の都市バーミンガムで催された。「ジョン・フランクリン卿北極に行く」や「妖精物語、犬のもとに行くアラジン」など幻灯の実演、エドモンド・ウィルキー（有名な画家デイヴィッドの息子）の幻灯界への貢献などの研究発表と多彩なプログラムであった。併せて幻灯機や種板の即売会、オークションも開かれた。

研究としては、映像史における幻灯の位置づけは、既に成果が出ている分野だ。しかし、幻灯を手がかりにヴィクトリア朝文化を再考する試みは、上記ハンフリーズが先鞭をつけたとはいえ、まだまだこれからだと思う。

経済史

ロンドン万国博再訪

神戸大学教授 重富 公生

以前、2002 年の本学会大会で報告させていただいた 1851 年ロンドン万博について、その後も少しずつ調べています。19 世紀にイギリスで開催された博覧会のうち、近年の日本では 1851 年万博以降の地方都市での博覧会にも関心が向けられているようです。また、ご承知のようにロンドン博については、本学会の松村昌家先生が『水晶宮物語』でひとつ完成したものを打ち出しておられるので、へたをすると屋上屋をかさねることもなりかねません。

万博にかんする一般的な関心はどうでしょうか。昨年は愛知万博で盛り上がっていたようですが、今年に入っても、一月には大阪難波のデパートで大阪万博展が開催されました（余談ですが、あの「万博音頭」に山本リンダさんバージョンがあったとは驚きでした）。いわば博覧会についての展覧会です。また先日、歴史家という雑誌に「1851 年大博覧会」というエッセイが掲載されていましたが、これは懸賞論文で、受賞者はシックス・フォーム・カレッジの生徒ということでした（*The Historian*, no.82, 2004）。日本の高校生にあたるのでしょうか、こんなところにも関心の高さが窺えます。

もちろん内外の研究の豊富な蓄積がありますので、現在のところそれを少しずつ消化しているのが現状ですが、おぼろげながら、つぎのふたつの接近視角を構想しています。ひとつは、万博開催にあたり、国内のさまざまな利害関係者はじっさいのところどのように開催を受けとめ、いかなる反応を示したのか、ということです。万博をめぐるあらわになった利害の亀裂については、近年の研究でも指摘されているところです。

もうひとつの視角は、この万博の展示品からどのような情報が汲み取れるかということです。浩瀚な公式カタログも出版されていますし、網羅的な展示品解説は松村先生も「あまり意味のないこと」と言っておられますので、よほどしっかりした指針が必要です。いま私がとくに注目しているのは、ひとつは T・リチャーズらによって注目された、19 世紀半ばのイギリスの「商品世界」の集積体としてのロンドン博というアプローチ。前回報告の延長線上のテーマです。もうひとつは、国境を越えてヨーロッパを単位とした技術伝搬のネットワークと分業圏の表象としての万国博という性格です（ロンドン博の場合、じつは展示品の大部分がヨーロッパからの出品で占められていました）。現在進行中の EU 統合の源流にかかわる視角でもあります。

いずれにしても、吉田光邦氏も指摘しているように、万博研究は本来学際的たらざるをえない性質があります。ロンドン博に少しでもご興味をお持ちの学会員のかたがたのご教示とご協働をぜひとも賜りたく、この紙面をお借りしまして、お願いいたします。

第4回大会シンポジウム レジューメ

女性教育

- ガヴァネスから近代的高等学校教育へ -

司会 甲南大学名誉教授 村岡健次

いささか大風呂敷のいい方になるが、日本の英学研究は、等しくイギリスを対象としながら、概して文学研究と歴史研究に分かれて展開されてきた。こうなった理由を説明するのは簡単ではないだろうが、一つには明治から戦前にかけて定着した大学の学部・学科制の影響、また歴史研究者の側からいうなら、明治この方日本は長らく政治の季節にあり、そのため歴史研究は、天下国家の学である政治学や経済学と密接に結びつかざるをえず、文学を含む文化史からは疎遠になりがちであった、という事情が指摘できるのではないかと思う。だが今日その政治の季節が過ぎ去ったのは明らかであり、また大学紛争以後、大学も学科制も大きく変わろうとしている。ところが歴史の惰性とは恐ろしいもので、わたしには、今もお英学においては、文学研究と歴史研究の相互並行現象が続いているように思える。

ところで本学会の特色は、現会長の松村昌家氏が本学会誌第1号の巻頭にも述べられているように、「あらゆる学問領域に開かれている」点にあり、その意味で文学研究と歴史研究の相互交流を一つの目的にしている。わたしはこの趣旨に賛同して本学会の会員になった者で、今回シンポジウムを企画するにあたって、この視点を優先させた。本シンポジウムの報告者が文学畑から2名、歴史畑から2名の計4名で構成されているのは、すぐれてこの理由によっている。

次に女性教育という本シンポジウムの主題だが、ヴィクトリア時代の社会における文化の一特徴に、J・S・ミルのいう「女性の隷属」があり、その「隷属」から女性を解放するために女性教育の改革が重要な歴史的課題であったことは、改めて言うまでもあるまい。その際民衆教育という分野もありうるわけだが、今回はエリート教育、すなわち、ジェントルウーマンを価値基準に、いわば良妻賢母の育成をめざしたイギリス上・中流階級の女性教育がどのように近代的な高等学校教育に転換していったかという問題に焦点を当てることにし、各報告者に報告をお願いした。その結果、歴史畑の河村氏は女性カレッジの成立を、香川氏は女性医学教育の展開を、文学畑の廣野氏と海老根氏は、期せずしてともに文学作品に現れたガヴァネスをテーマに選ばれた。こうして偶然も手伝ったが、「女性教育—ガヴァネスから近代的高等学校教育へ」という格好の論題を得ることができた。

シンポジウムの報告では、文学畑と歴史畑の報告者のあいだで、方法論の相違が際立った。全体討論でも質問が相つぎ、文学畑と歴史畑の交流には役立ったのではないかと思っている。

エリザベス・ジェサー・リードと ベドフォード・カレッジの創設

京都府立大学教授 河村貞枝

ヴィクトリア時代の半ばから開始された女性のための教育改革の道のりの端緒は、「困窮するジェントルウーマン」の典型例であるガヴァネスを救済せんとする試みから生まれてきた二つの女性のカレッジ、クィーンズ・カレッジ(1848)とベドフォード・カレッジ(1849)の創設にあったことはよく知られている。本報告では、草創期の事情およびその後のカレッジの発展からして、後者ベドフォード・カレッジのほうがより重要な「初めの一歩」であったということを詳述した。

ベドフォード・カレッジの創設者エリザベス・ジェサー・リード(1789-1866)は、夫と両親の死後、「自立できる資産があり、家族のしがらみをもたない女性」として利他主義・博愛主義的实践に生涯を捧げることになる。なかんずく彼女にとって重要な二つの「コース」は、アポリッショニズムと女性教育改革運動であり、両者は不可分に結びついていた。

報告の概要は以下のとおりである。リード夫人の人物像の可能な限りの復元、ベドフォード・カレッジ創設の経緯(クィーンズ誕生の一年前にベドフォードの手探りの試みが始まっていた)、クィーンズ・カレッジとの関係、草創期の女学生の受講状況、カレッジの管理運営における女性の顕著な役割(とくに「レイディ・ヴィジターズ」の集団を重視)など。さらに、同カレッジ誕生の背景として、リード夫人の目覚ましい交友関係を「ヨーク・テラス・サークル」と命名して描き出した。

結果として、リード夫人のサークルとベドフォード・カレッジは、ヴィクトリア時代初期にミドルクラス女性の置かれた相対的に孤立した状況の中で、初期のフェミニストたちが、相互に交流し、そのネットワークを広げていくにはかりしれない貴重な準備をなしたということができよう。さらに、そこには、女性がイニシアティブをとりつつ、男女の間にめざましい協力関係が存在していた。とはいえ、女性カレッジの草創期には女性高等教育に関する男女の考え方のずれも大きく、実践の道のりは決して平坦なものではなかった。そういった様相をベドフォード・カレッジ文書から歴史的に再現することを試みた。

エリザベス・ジェサー・リードとヨーク・テラス・サークル、そしてベドフォード・カレッジの三者が一体となって、メアリ・ウルストンクラフトから1850年代末のフェミニスト集団「ランガム・プレイス・サークル」の活動の間の、イギリス女性の自己解放の歴史の、「連結の環」を形成していた、と結論づけた。

女性の医学教育をめぐるポリティクス - ジェンダー、植民地、プロフェッショナリズム -

西九州大学教授 香川 せつ子

19世紀の後半、医業は「教養あるミドルクラス女性」の職業として脚光を浴びた。「家庭の天使」と崇め奉られた女性たちの医業へのチャレンジが多くの妨害と困難に遭遇したのは想像に難くない。本報告では、女性の医業開放運動と伝統勢力との攻防の過程から、ジェンダーとセクシュアリティ、専門職化、植民地支配などヴィクトリア朝英国社会を特徴づけた境界線の揺らぎを垣間見ることとした。

近代医学の発達、医師養成の高等教育機関への集中と、女性を含む民間医療者の排除を通して、医業のプロフェッショナル化を促進した。「科学的」知識を占有する男性医師に格好の患者市場を提供したのが、ミドルクラス女性である。「男性医師」対「女性患者」というジェンダー化された関係が一般化するなかで、女性の医師職志願は領域規範の転覆に通じる要求として顕在化した。

女性の医業開放要求は、1860年代に勃興した女性高等教育運動の重要なモメントとなる。社会的、能力的な「劣者」である女性の侵入阻止を図る医学界は、反対派の急先鋒に躍り出た。彼らは男女の身体的精神的差異を本質視する「科学的」理論を動員し、高等教育が女性の生殖機能を破壊すると断定したのである。他方で、医業開放運動の言説をみると、反対派が主張する「男女の差異」を逆手にとり、「女性だからこそできる医療行為」を強調するものが主流をなした。

女性の医業進出に対する社会的承認は、「男女平等」の論理よりも、家庭内での病人の介護、村落の産婆など女性に割り当てられてきたケア役割の正統性への主張と、「女性患者の診察を同性医師の手で」という社会的ニーズの強調を通して、次第に現実のものとなる。1870年代末の公式開放以降、女性医師の養成戦略は、男性医師との差異化を軸に展開された。そのひとつが、女性や子どもの医療への重点化であり、もうひとつが植民地医療への着目である。

世紀転換期にかけての女性医師の増大は、植民地インドの存在抜きに語れない。「病と隷属からのインド女性の救済」、それによる「帝国への貢献」というミッションこそが、多くの女性を医師志願へと駆り立てた。その舞台装置は、女性を男性から隔離する“zenana”という空間、先住民の土着的な民間医療を、「文明」「科学」の対立項に置くことで構築された。インドでの女性の医療活動の拡大は、現地医療システムに、ジェンダー、人種、専門性を指標とするヒエラルキーが形成される過程でもあった。

「女性医師」というヴィクトリア朝社会の少数者集団は、一方で男性的価値への同一化と差異化によって、他方で植民地女性という「他者」の客体化を通して、近代医療の一角に独自の領域を確保した。女性専門職の登場により、ジェンダーの境界線は一層複雑に引き直されたのである。

1840年代のガヴァネス小説に見る 女性教育

京都大学助教授 廣野 由美子

ヴィクトリア朝時代における女性教育の方法には、主として、女子のための寄宿学校へ行くか、ガヴァネスによって家庭教育を受けるかの、二つの選択肢があった。ことにガヴァネス教育は、娘を親の影響下において家庭で教育できることや、学費が安価であるという経済的理由などから、上流・中流階級の親たちに好まれ、ヴィクトリア朝時代を通じて盛んであった。しかし、ガヴァネスの志願者の数が増大するにつれて、ガヴァネスが冷遇されるようになり、1840年代には、彼女たちの苦境が多くのジャーナル、パンフレットなどで取り上げられ、救済運動も始まった。

そのような動向のなかで、ガヴァネスはどのような形で小説に登場していただけるのか。ガヴァネスは、18世紀の終わりころから小説の周辺部に出没し始めていたが、1847年に、文学史上に残る三つのガヴァネス小説、すなわちサッカレーの『虚栄の市』、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』、アン・ブロンテの『アグネス・グレイ』が華々しく登場した。本発表では、三作品のなかで、女性教育の在り方がどのように描かれているかを、いくつかの観点から比較しつつ検討した。

女主人公のベッキー・シャープ、ジェイン・エア、アグネス・グレイは、ほぼ同年齢のころガヴァネスとして世間へ乗り出す。その出自や経済的境遇、ガヴァネスとなった経緯は異なる。画家の娘であるベッキーは家柄のうえでいちばん下であり、彼女とジェインが無一文の孤児で、食べてゆくために自ら働くという選択肢しかなかったのに対して、アグネスは零落した牧師の娘であるとはいえ、いちばん恵まれた境遇にあったと言える。しかし、作品中に描かれている仕事の内容を比較すると、アグネスが、三者のなかでもっとも冷遇され辛酸を嘗めたことが読み取れる。では、学歴や資格という点ではどうか。ジェインとベッキーは、女子寄宿学校で優秀な生徒として多くの学科目を習得し、かつ教師としての経歴を経たうえで、学校からの推薦状を得て、ガヴァネスとして採用される。他方アグネスの職業上の素養は、もっぱら母親から受けた家庭教育によって培われたものだった。

三作品が出版された翌年1848年には、ガヴァネスの地位の向上を目指し彼女たちに学力と資格を与えるために、Queen's College が設立された。そのような時期に、ベッキーやジェインのような、学歴とキャリアを武器として幸運を勝ち得る新しいタイプのガヴァネスが小説のなかに登場してきたという現象は、何を物語っているのか。それは、たんに有力な花嫁候補たるレディを目指すだけではなく、職業につながる専門教育が女性にも必要とされる時代へと、次第に推移してゆく予兆とも見ることはできないだろうか。

「もとガヴァネス」の人生行路

東洋大学教授 海老根 宏

ヴィクトリア時代のガヴァネスたちの貧しく惨めな境遇や老後の貧しさについては、多くのことが書かれてきた。大多数のガヴァネスたちにとって、そのような記述が正しかったことは疑いない。ブロンテ姉妹の小説はそのようなガヴァネス像をまざまざと描き出している。しかしヴィクトリア時代や、その直前の摂政期の小説を読むと、もとガヴァネスの女性が雇い主の家族と身分を越えた人間関係を結んでいる様子を描いたものもいくつか存在している。例外といえはその通りであろうが、ガヴァネスと雇用主の家族、特に生徒である娘たちとの、制度の網の目をすりぬけるような親密な関係がありえたことが窺えるのである。

ジェイン・オースティンの『エマ』には、ヒロインのもとガヴァネスであるウェストン夫人が登場する。彼女は今では近くに住む紳士の妻として幸福な生活を送り、小説の終盤には出産する。Kathryn Hughes は *The Victorian Governess* (1993) において、契約関係しか認めない中産階級の家庭とは違って、上流階級の家庭は雇い人への恩情というより封建的な価値観を抱いていたと述べ、また Alice Renton は『歴史のなかのガヴァネス』(1991, 河村貞枝訳)で、「雇い主の階層が高くなればなるほど、ガヴァネスに払われる思いやりや礼儀も増してくる」と述べているが、結婚後もエマと親しく往き来しているウェストン夫人はまさにこの例であろう。

彼女がやもめ暮らしのウェストン氏と結婚したことについては、エマの実家ウッドハウス家やその交際する紳士階級仲間の力添えがあったことは想像に難くない。エマは自分が彼女の結婚をお膳立てしたと思ひ込むほどである。このことはエマがウェストン夫人の結婚話に興味津々だったことを思わせるが、生徒である上流階級の若い娘には、自分がいずれ加わる性的関係の世界を体現する年上の女性と考えられたのであろう。そこには出産までも含まれている。

ガヴァネスが雇い主の家の男たちにとって性的存在だったことがしばしば強調される(典型的な例が『虚栄の市』のベッキー・シャープとジェイン・エアである)。しかしガヴァネスは生徒であった若い娘たちにとっても、別の意味で性的存在だったのである。『エマ』のシチュエーションをヴィクトリア時代に移したエリザベス・ギャスケルの『妻たちと娘たち』でも、カムナー伯爵家の娘たちにとってガヴァネスのクレアの恋愛は非常に興味めくであった。娘たちが成長し、もとガヴァネス・クレア(ギブソン夫人)の愚かしさや上品ぶりを笑えるようになっても、彼女らの間にはからかい混じりの親しさが続いている。ガヴァネスの存在は、純潔が絶対条件であった当時の娘たちにとっても、別世界への扉となりえたのである。

ディズレイリの記憶とプリムローズ

京都大学助教授 小関 隆

ベンジャミン・ディズレイリの命日がプリムローズ・デイというある種の記念日になってゆくプロセスを明らかにすること、そして、プリムローズ・デイの語りを通じて、ディズレイリの記憶がいかに造形されていったのかを検討すること、私の報告が課題としたのはこの2つである。

ディズレイリの命日=4月19日にディズレイリ像をプリムローズで飾りつける慣習の根拠とされたのは、「死の床にあったディズレイリの見舞いにヴィクトリア女王が彼の好きなプリムローズを贈り、葬儀の際にも女王のカードを添えたプリムローズの花輪が棺に載せられた」という「伝説」であった。1883年のディズレイリ像除幕式を契機として、命日にプリムローズを着用する慣習を広めようとする動きが本格化し、女王とディズレイリの親愛な関係のイメージにインスパイアされた多くの人々がこうした働きかけに応えた。第1次大戦前まで、毎年の命日は、プリムローズを身につけ、ディズレイリ像の飾りつけを見物する人々で、お祭り騒ぎのような雰囲気にも包まれる。見物人の多くはディズレイリの信奉者ではなかったが、それでも、毎年ごく軽い気持ちで保守党の元党首の銅像を眺める人々の間に保守主義的な気分が浸透していったことは否定できない。プリムローズ・デイは、多くの人々をいわば「無自覚な保守主義者」として動員する機会となっていたのである。

命日に故人を語ること自体は当たり前だが、ディズレイリに関して特異といえるのは、賑やかな雰囲気の中、小さくないオーディエンスに向け、死後延々と語られたことである。そして、プリムローズ・デイにおける反復的な語りは、「国民全体に奉仕したことで、党派や階級、地域をこえて尊敬と愛惜を集め、中でも女王から特別に高く評価され、私的にも愛された国民的英雄」、「その精神が今日の状況においても有効性を発揮する稀有の先見性をもった政治家」といった形象へとディズレイリを仕立て上げていった。その際、決定的な強みとなったのが、女王とディズレイリの強い結びつきを印象づける「伝説」の存在であった。

1961年に「伝説」の信憑性が公式に否定されたにもかかわらず、ディズレイリ像の飾りつけはその後30年以上つづいた。同じく19世紀を代表するピール、パーマストン、グラッドストーン、といった政治家も各々に追悼はされただろうが、プリムローズほど魅力的な表象に結びつけられることも、ディズレイリほど継続的に想起されることもなかった。ディズレイリの記憶は、プリムローズにシンボライズされたために、いわば別格のインスピレーションの源となることができた。慎ましい花がもつ力といえよう。

マンチェスター学会参加の記

大手前大学教授 松村昌家

2005年7月19日から21日までの3日間、マンチェスター・メトロポリタン大学で学会が開かれた。正式の称は“Elizabeth Gaskell and Manchester: Identity, Culture and the Modern City”で、同大学に併設されているマンチェスター地域史センターと共催の国際学会である。

アラン・シェルストン教授からこの報せを受けとったときに、まず思い出したのは、われわれの学会における最初のシンポジウムのテーマが「都市と文化——マンチェスターとリヴァプールを中心に」であったことだ。ひょっとすると何かつながりがあるかも、という好奇心がわいた。

そこでヴィクトリア朝マンチェスターの野心的な文化事業の一つであった美術名宝博覧会に関するペーパー“The Hertford Gallery in the Manchester Art Treasures Exhibition”をもって、この学会に臨んだのである。

この学会には、研究発表以外にもう一つの目的があった。それは、84 Plymouth Grove（当時は42）に現存するギヤスケルの旧家を永久保存するための運動を盛り上げることであった。学会がはじまる前日の夕方に、マンチェスター中心部から南東へ離れたところにあるこの家で、小さな会合が開かれた。この住所から発信されたギヤスケルの書簡のいくつかが思い出されて、感動がわいた。

面白いのは、ロンドンのディケンズ・ハウスが48 Doughty Streetで、こちらは84 Plymouth Groveだ。ディケンズ・ハウスと同じように、ギヤスケル・ハウスも博物館として永久に保存されて、マンチェスターにおける文化遺産としての役割を果たしてくれることを期待したい。

3日間を通じて研究発表を行ったのは、30数名。そのうち日本からの参加者は大野龍浩さんと開田朋子さんとで3名、それにグラスゴウ在住のジェイムズ治美さんがきていた。発表はごく一部の講演形式のものを除いて、2または3室に分かれて行われた。とうてい全体を把握できる状況ではなかったが、「ギヤスケルとマンチェスター」が圧倒的な関心を集めるなかで、いくつかの異色の発表があったのが印象的であった。一つは、マンチェスター文化人としてのJames Crossleyを論じたもの、そしてもう一つは、小説家としてのKay-Shuttleworthを論じたものであった。ともに新発掘の輝きをおびているように思えた。

学会2日目の夜にタウン・ホールで開かれたシヴィック・レセプションには、格別の趣があった。あのゴシック様式の建物の大広間には、フォード・マドックス・ブラウンが描いた12点の大きな壁画が飾られている。専門家による解説付きで、ゆっくり見学することができた。マンチェスター文化の象徴的一側面に触れる思いがした。

【単著】

- 宇田和子『私のネパール菓子』（開文社）
川崎良二『静かな眼差し』（編集工房ノア）
河内恵子『深淵の旅人たち』（慶應義塾大学出版会）
Terauchi, Takashi. *Revivalism and Conversion Literature*. Hon's ペンギン.
廣野由美子『批評理論入門』（中公新書）
松本啓『イギリス小説の知的背景』（中央大学出版部）
村田和博『経営学』（五紘舎）

【共著】

- 井野瀬久美恵『人種概念の普遍性を問う』（人文書院）
井野瀬久美恵『帝国への新たな視座』（青木書店）
上山泰・松井豊次・渡千鶴子・徳永梓『英語・英米文学の視座』（大阪教育図書）
河内恵子『恋の研究』（慶應義塾大学出版会）
川端有子『英米児童文学の黄金時代』（ミネルヴァ書房）
河村貞枝『結社のイギリス史』（山川出版社）
佐藤朋子『イギリス小説の探求』（大阪教育図書）
中岡洋・内田能嗣・田村妙子・前田淑江・松井豊次・清水伊津子『大いなる醸造桶』（大阪教育図書）
中岡洋・内田能嗣『ブロンテ姉妹を学ぶ人のために』（世界思想社）
中岡洋・内田能嗣『感動愛の物語』（ひょうたん書房）
橋本順光『日露戦争研究の新視点』（成文社）
Hashimoto, Yorimitsu. *Histories of Tourism*. Channel View.
Hirai, Masako. *D. H. Lawrence: Literature, History, Culture*. Kokusho Kankokai
廣野由美子『越境する演劇』（英宝社）
富士川義之『文学と絵画』（英宝社）
松村昌家『交流する文化の中で』（大手前大学）
松村昌家・千森幹子『児童文学翻訳作品総覧（イギリス編1）』（ナダ出版センター）
Matsumura, Masaie, ed. *Tour, Adventure and Rambles in England*. 8 vols. Eureka.
矢次綾『ブッカー・リーダー』（開文社）
- ### 【翻訳】
- 太田良子『幸せな秋の野原』ボウエン（ミネルヴァ書房）
小野寺健『青春のオフサイド』ウェストール（徳間書店）
佐々木徹『ディケンズの遺産』スレイター（原書房）
中尾真理『古書の聖地』ポール・コリンズ（晶文社）
- ### 【共訳】
- 岩井学『D. H. ロレンス書簡集・III・1912』（松柏社）
内田能嗣『ほんとうの物語』アトウッド（大阪教育図書）
佐々木徹『エドモンド・ウィルソン批評集1（社会・文明）』（みすず書房）
佐々木徹『エドモンド・ウィルソン批評集2（文学）』（みすず書房）

第5回大会報告

昨年11月19日(土)午後10時より、日本ヴィクトリア朝文化研究学会第5回大会が、中京大学で開かれた。当日のプログラム(総合司会 内田能嗣氏)は以下のとおり。出席者も140名におよび、様々な観点から参加者間で活発な議論が交わされ、充実した一日だった。

会長挨拶 松村昌家氏

研究発表

第一室(司会 井野瀬久美恵氏)

1. 澤田望氏「英領ラゴスの「黒いヴィクトリア朝人」 - オトンバ・ペインの事例を通して」
2. 松隈達也氏「19世紀前半英国の消費社会と「デザイン問題」」

第二室(司会 玉井璋氏、太田良子氏)

1. 江澤美月氏「欲望の客体から主体へ - “Goblin Market”における女の関係」
2. 高橋美帆氏「女流詩人の葛藤松 - クリスティーナ・ロセッティと金子みすゞ」
3. 西村美保氏「ヴィクトリア朝の階級とジェンダーをめぐる一考察 - Arthur Munby と Hannah Cullwick の場合」

理事会

会場挨拶 中京大学学長 小川英次氏

特別研究発表(司会 佐々木徹氏)

小関隆氏「ディズレイリの記憶とプリムローズ」

シンポジウム(司会 村岡健次氏)

「女性教育 - ガヴァネスから近代的高等学校教育へ」
パネリスト 河村貞枝氏、香川せつ子氏、廣野由美子氏、海老根宏氏

総会

<報告事項>

1. 2004年度活動報告
2. 学会誌第3号について
3. ニュースレターについて

<審議事項>

1. 役員人事

事務局長に山本紀美子氏(暫定的に会計を兼ねる)、新理事に重富公生氏と山本紀美子氏、ニュースレター編集委員に松岡光治氏、運営委員(総務)に大久保恭子氏、新運営委員に松岡光治氏、露木紀夫氏、幹事に上山泰氏、事務局員に小野ゆき子氏、奥村真紀氏、関口章子氏、皆本智美氏が選出された。

2. 会計報告

2004年度決算報告、および2005年度予算案が提出され、了承された。

3. 2006年度大会について

溝口薫氏に準備委員を依頼する案が了承された。

4. その他

外国人研究者招聘について

懇親会

会場を八事マルベリーホテルに移して午後6時より行われた。松岡光治氏の司会で、小野寺健氏の乾杯の音頭に続き、興味深いスピーチなど、瞬く間に楽しい懇親会の時間が過ぎた。出席者80余名。

第6回大会のお知らせと研究発表の募集

第6回大会は、2006年11月18日(土)午前10時から神戸女学院大学で開かれる予定です。運営委員会(2006年3月30日)での討議の結果に基づいて、シンポジウムのテーマは「ダーウィニズム:光と陰」(司会:荻野昌利氏、講師:富山太佳夫氏、松永俊男氏、宮崎かすみ氏)、特別講演はAndrew Sanders教授(ダラム大学)の“The Victorians and History”(仮題)と決定しました。

研究発表を希望する会員は、発表要旨(400字)に略歴(住所、氏名、電話番号、メールアドレスを明記)と主な業績表を添えてプリントアウトしたものと、それらを保存したフロッピー・ディスクを下記の学会事務局宛まで送ってください。応募書類は2006年7月21日(金)必着のこと。なお、事務局では来年度から研究発表の応募と締切を早めることを検討中です。

『ヴィクトリア朝文化研究』編集委員会からのお知らせ

2006年11月に発行予定の学会誌『ヴィクトリア朝文化研究』(*Studies in Victorian Culture*)第4号に掲載する論文を募集しますので、ご応募ください。投稿規定は『ヴィクトリア朝文化研究』第3号に掲載されています。締切は2006年6月30日。原稿の送付先は下記の学会事務局。

会費納入のお願い

2006年度の会費(一般会員6,000円、学生会員3,000円)を同封の振込用紙で2006年7月31日までに納入してください。住所、電話番号、勤務先などに変更があった方は、振込用紙の通信欄にその旨を明記し、新しい情報を書き込んでください。

編集後記

昨秋、新野先生の衣鉢を継いだ途端に、塗炭の苦しみに悩まされましたが、なんとか皆様の原稿を8頁に収めることができました。この苦しみを避けるべく、次号は12頁の予定です。会長および運営委員長と相談の上、今回から研究発表のレジュメに代わり、欧米のヴィクトリア朝研究者のエッセイを掲載することにしました。次号以降も海外のさまざまな研究者にエッセイを依頼しますので、乞う御期待。今号は経費削減のために編集者作成の版下を直接印刷したものです。見苦しい点は、乞う御宥恕。(M.M.)

The Victorian Studies Society of Japan
Newsletter No. 5 1 May 2006

発行者 © 日本ヴィクトリア朝文化研究学会
代表者 松村昌家
編集者 松岡光治
事務局 日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局
〒533-0007 大阪市東淀川区相川3-10-62
大阪成蹊大学山本紀美子研究室
事務局長 山本紀美子
TEL/FAX 06-6829-2687
印刷所 株式会社 英宝社
〒162-8691 東京都新宿区市谷左内町21番地
TEL 03-5206-6020 FAX 03-5206-6022